

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和元年6月12日現在

機関番号：13901

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2018

課題番号：26370821

研究課題名(和文)北インド中近世城郭史研究

研究課題名(英文)Medieval and Early Modern Forts of Northern India

研究代表者

三田 昌彦(Mita, Masahiko)

名古屋大学・人文学研究科・助教

研究者番号：30262827

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,800,000円

研究成果の概要(和文)：衛星画像分析および実地調査の結果、ラージャスターン中近世の城郭は概ね 大規模山上城砦、小規模山上城砦+山麓宮殿城砦+城郭都市、平地城郭都市(さらに丘陵城砦+城郭都市)に分類することができ、時系列的には13世紀以前は が目立ち、16世紀以降は がスタンダードになっていくことが跡付けられた。その変化は王権と在地社会との関係がアドホックで緩やかな13世紀以前の国家システムから、ムガル体制下で在地王権として在地支配を確固たるものにしていく歴史過程に対応するものだとする仮説を提示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

城郭の類型化を試みるとともに、その変遷を歴史学研究との連関を意識して跡付けた点(ラージャスターンの城郭構造にも歴史的变化が確認できること、政治社会構造との関係を論じること)。個別の城郭、例えばジャイプルの歴史学研究などは存在するが、数多くの城郭を類型化・整理してその変遷を歴史的に跡付けたものとしては、インド史では本研究がパイオニアである。ただしなおデータが不十分であり、初歩的な仮説を提示するにとどまる研究である。

研究成果の概要(英文)：From our analyses of satellite images of forts, 8th to 18th-century Rajasthan forts are classified into three major types: (1) large-scale hilltop fort, (2) minor hilltop fort + fortified palace-city, and (3) flat fortified city. Chronologically, type (1) was comparatively popular before the 13th century, particularly as royal capital cities, but from the 16th century onward, especially in the 17th century, both types (2) and (3) had become standard as major Rajput kingdoms became stable as regional royalty under the Mughal rule.

研究分野：インド中世史

キーワード：城郭 インド史 ラージプート ラージャスターン 都市 軍事史

1．研究開始当初の背景

インド中近世（8～18世紀）は、ラージャスターンからデカンにかけて、とくに山岳・丘陵を利用した城砦がさかんに建設された時代である。しかしこうした城砦・城郭都市が中近世を通してどのような変化をたどってきたか、それが社会・政治システム、軍事史、都市史、社会経済史などどのように関連していたかといった問題はほとんど手をつけられていない。インドの城郭史研究は城門や宮殿など個別の構築物に関する建築史的・文化史的なアプローチが主流であり、また文献学においては建築学書をはじめとする古典文献に記される城砦の類型・様式論が極めて抽象的に論じられてきたにすぎない。こうした研究状況の要因は多くの城郭プラン（平面図）が公表されていなかったことに求められる。

2．研究の目的

本研究は北インド、とくにラージャスターンを中心に、大規模山上城塞から城郭都市形成へと移行する城郭の歴史的プロセスを明らかにすることを目的とする。そのために、可能な限り多くの城砦・城郭都市の立地状況と規模・構造に関するデータを網羅的に集めてその傾向を把握し、城砦・城郭都市構造の変遷をインド社会の歴史的变化の中に位置づける。

3．研究の方法

近年非常に利用しやすくなった衛星画像による城郭の平面データをできる限り収集し、ならびに実地調査による三次元の情報を平面データに付加することで城郭の立地状況と構造を明らかにし、それらを城砦・宮殿・市街地の配置のあり方から典型的に整理する。同時に刻文・文献史料によってできる限り城郭の創建・改築の年代情報を収集し、可能な限り年代的変遷を再構成する。

4．研究成果

(1) ラージャスターン城郭の諸類型：立地と城郭構造からのタイポロジー

(i) 大規模山上城砦（Ranthambhor, Citor, Jalor, Khandar, Bayana, Timangarh, etc.）

- ・山頂部の極めて広大なスペース（1辺が1km以上）を城壁で囲う。比較的平坦なスペースのある山上部が選択されている。比高百数十 m～400m くらいで山麓からのアクセスが悪い。城砦内には王宮、後宮、兵舎、厩舎、寺院群、貯水池および階段井戸、工房および職人の住居などがあり、ほぼ都市機能を完備する（農地のあった可能性もあり）。山麓の市街区は城砦の城壁網から分離しており、一般に城壁で囲われていた形跡が見られない。

- ・特異な事例：山頂を城壁で囲うのではなく広大な山岳の各所に幾つもの曲輪を構成する Acalgarh（日本の戦国期の山城に近い）。

(ii) 小規模山上城砦 + 山麓宮殿城砦 + 城郭都市（Amber, Bundi, Dungarpur, Dausa, etc.）

- ・山上部に小規模な城砦を築き、城下市街地、城砦化した山麓（ないし山腹）宮殿を城壁網で接続する。山上城砦内にも王宮、後宮、兵舎、寺院、噴水付き庭園があり、山麓宮殿とともに二重の王宮構成をとっている。Amber、Bundi とともに 16 世紀後半から 17 世紀にかけて（ムガル支配下）山麓に宮殿を建設し、城下の市街区から山上城砦まで城壁で囲みはじめる。

(iii-a) 山麓宮殿城砦 + 城郭都市（Bhangarh (1573-1783 年), Sirohi, Indragarh, Nimrana）

- ・(ii)の山上城砦が欠如したタイプ。

(iii) 平地城郭都市

- ・このタイプは周囲に山岳があるにもかかわらずあえて平地を選択している場合 (iii-a) と、周囲に山岳がないために平地以外選地できない場合 (iii-b) とに分ける必要がある。

(iii-a) 平地城郭都市（宮殿 + 市街区）、山上城砦（Jaipur, Alwar, Udaipur, Kishangarh, Karauli, Candravati, etc.）

- ・広大な平地に（直行する道路を持つ）市街区を構成し、その中心に宮殿を配置、全体を城壁で囲う。山上城砦と平地城郭都市とが城壁で連結しているかどうか不明。山上城砦はないものもある（Kishangarh, Karauli）。

(iii-b) 平地城郭都市（宮殿 + 市街区）（Bikaner, Phalodi, Nagaur, Fatehpur, Lodrava, etc.）

- ・一般には中央に政庁を伴う宮殿城砦（内城）、その周囲に外城で囲まれた市街区といった城郭構造をとる。

(iv) 丘陵城砦 + 城郭都市（Jodhpur, Jaisalmer, Mandor, Sojat, Bharatpur, etc.）

- ・オープンな平地に独立している小山（丘）を宮殿城砦として選地。その宮殿城砦が政庁でもあり、王家の守護神の神殿もこの狭いエリアに配置される。城砦の周囲に広がる市街区を堅固な城壁で囲う（現存のものは 17・18 世紀）。多くがラージャスターン北西部の乾燥度の高い沙漠地帯（目立った山岳がない）。

(2) 立地と構造の歴史的特性について

- ・13 世紀以前の城郭構造と 16・17 世紀の城郭構造とを比較すると、バリエーションがあるとはいえ前者が(i)のタイプ、後者が(ii), (iii)のタイプが主流であり、そこに変遷の傾向を読み取ることができる（なお(iv)は地勢的条件に大きく規定される）。後者の構造上の顕著な特質は宮殿・政庁の山麓・平地化と市街区の城郭化による宮殿・政庁と市街区との連結・一体性であり、王権と市街区との関係の緊密性を想定することができる。その歴史的展開を仮設的に提示すれば以下ようになる。

- ・13 世紀以前は王都をはじめラージプートの政治的拠点が山上城砦にあることが多く、山麓の市街地を城壁で囲うことはなかったが、14 世紀後半以降ローカル色の強い新興ラージプートが改めて国家形成を行うようになると大規模山上城砦を国家形成の拠点とはしなくなり、その拠点を山麓・平地に求めてそこに宮殿城砦を建設し、17 世紀ムガル時代には市街地をも城壁で囲って城郭都市を形成していく。そのプロセスは 13 世紀以前の王権と在地社会との関係がアドホックで緩やかな国家システムからムガル体制下で在地王権として在地支配を確固たるものにしていく歴史過程に対応するものだと考えられる（雑誌論文、学会報告）。

(3) 研究の位置づけ

- ・個別の城郭、例えばジャイプルの歴史学研究などは存在するが、数多くの城郭を類型化・整理してその変遷を歴史的に跡付けたものとしては、インド史では本研究がパイオニアである。

(4)課題と展望

- ・調査件数不足：実地調査できた件数は約 20 件でしかない。また城砦データ収集においても、純粋に軍事的な小規模の城砦構築物はチェックから漏れている。
- ・年代確定：いくつかの城郭について改築の経過が判明したが、なお全く不十分。構築物の年代確定のために考古学的・建築史的調査の進展および碑文・文献史料発掘が必要である。
- ・大規模山上城砦から城郭都市形成という流れが考えられるとは言え、例外的な城郭構造が数多く見られ、これらを単に例外とするだけでは不十分である。
- ・軍事史（軍事技術の発展）との関係：城砦は本来軍事施設であり、軍事史との関係が深められなければならない。城郭史との関係では今後、戦術・攻城形態などの研究の深化が必要。

5 . 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計 4 件

MITA, Masahiko, Sanskritized Imperialism and State Integration in Early Medieval North India (c. 950-1200), Karashima N, and Hirosue M (eds.), *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia* (Toyo Bunko Research Library 16)、査読有、2017、179-202

三田 昌彦、パンチャクラとマハージャナ——中世初期ラージャスターン・グジャラートの都市行政と集会組織、太田信宏（編）、前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり（AA 研）、査読有、2017、55-95

MITA, Masahiko, The Formats of Grant Charters and the Stratified Royalty under the Pratihara Rule, Karashima N (ed.), *Medieval Religious Movements and Social Change* (Toyo Bunko)、査読有、2016、137-156

三田 昌彦、南アジア 前近代 : インダス文明～12 世紀、水島司他（編）、アジア経済史研究入門（名古屋大学出版会）、査読有、2015、91-103 頁

〔学会発表〕 5 件

三田 昌彦、15-17 世紀ラージャスターンの銅板施与勅書の様式と語法——中世初期からの転換、AA 研共同研究「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」研究会、2018 年 10 月 7 日、東京外国語大学

三田 昌彦、ラージプートの歴史叙述とムスリム支配——多元的文化世界における正統性の模索、日本南アジア学会 30 周年記念シンポ（東京）、2018 年 5 月 19 日、東京大学

三田 昌彦、関係性の中の国家——インド中世の非領域的国家システム、2017 年度 KINDAS「南アジアの長期発展経路」第 2 回研究会、2018 年 1 月 27 日、京都大学

MITA, Masahiko、Poly-State System in South Asia and Dr. Lieberman's Comparative Historiography、International Workshop: Writing Global History from Southeast Asian Perspectives、2015 年 11 月 15-16 日、大阪大学

三田 昌彦、パンチャクラとマハージャナ——中世初期ラージャスターン・グジャラートの都市行政と集会組織、AA 研共同研究「前近代南アジアにおける中間的諸集団の再検討」研究会、2014 年 7 月 12 日、東京外国語大学

6 . 研究組織

(1)研究分担者 なし